

妙法蓮華經なり。——三大秘法鈔

と申されたのに深く注意しなければならぬ。されば吾々が題目を唱へるのは自他の爲に大なる功德を積むことになるのである。

此の自ら利すると他を利するとの二事は相並んで進むべきものである。自己が一步だけ佛に近づけば、それだけ多く他を利益し化導すべき力が具はる。他を利すること一段の多さを加ふれば、それだけ自己の價値が高まつて来る。斯く自利は利他を生じ、利他は自利を生み、相伴ひ相助けて次第々々に佛に近づいて行くのが菩薩の行である。必ずしも言説を以て人に勧めるのみが化他といふわけでは無い。吾が心に確とした信仰があつて、貴い佛の力が常に吾が心に宿つて居さへすれば、一言一行一舉一動の間に自ら貴い光が迸つて、自ら周圍の人を化すべきである。佛の常住の説法には及ばずとも、それと趣を同うした善事を、各自に積むことが出来なければならぬ。

化他の要

君子は過ぐる所の者化し、存する所の者神なり。上下天地と流を同うす、豈に之を小補すと曰はんや。——孟子

とは蓋し斯る人の謂であらう。斯る人が多くなるに隨て娑婆と名けられた此土は、次第に寂光の佛土に近くなつて行くのである。此の事を努めずして、たゞ此土を穢土として遠離し、往いて淨土に生れんことをのみ求めるは、惑ひの甚しきものといはなければならぬ。

修行の處

問て云く、法華經の修行何れの淨土を期すべきや。答て云く、法華經二十八品の肝心壽量品に云く、我常在此娑婆世界。亦云く、我常住此。亦云く、我此土安穩。此文の如きは本地久成の圓佛、此世界にいませり。此土を捨て何れの土を願ふべき。故に法華經修行の者は、所住の處を淨土と思ふべし、何を煩しく他處を求めん。——守護國家論

と教へられ、また更に

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず、所化以て同體なり。——觀心本尊鈔
とも教へられてある通り、佛の常住する如く、吾々の生命も不滅である。而して吾々の心に正しい信の起る瞬間から、直ちに此身を佛にし、此の國土を淨土とする貴い働きが起るのである。

感應

是れは吾々が恣に思ひ定めたのでは無い、佛によつて與へられたる保證があるから、疑ふに及ばぬことである。釋迦牟尼佛として吾々に現はれたまふた本佛が、自らその壽命の久遠なることを示し、自ら常住に說法することを示し、自ら吾等衆生に對して、
毎に自らはの念を作す、何を以て衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん。——壽量品
といふ念を以てせらるゝことを明された。それが法華經なのであるから、法華

經は即ち吾々の心と佛との交通の門ともいふべきものである。吾々が此の示されたる門を通じて、吾々の心を佛に致せば、佛の力は吾々の心に加はるから、即ちこゝに感應が起り、今までに曾て知らなかつた靈妙なる作用が起るべきわけである。此の法華經一部の精神を妙法蓮華經の五字に込めてある故に、吾々が専心に此の五字を念ずることによつて、本佛と吾々との間の感應が生ずるわけになるのである。

五字の意義

日本の二字に六十六國の人畜財を攝盡して一も残さず、月氏の兩字に七十箇國無からんや。妙樂の云く、略して經題を擧ぐるに玄に一部を收む。又云く、略して界如を擧ぐるに、具さに三千を攝す。文殊師利菩薩、阿難尊者、三會八年の間の佛語、之を擧げて妙法蓮華經と題し、次下に領解して云く、如是我聞と云々。問ふ、其義を知らざる人、唯だ南無妙法蓮華經と唱へて解義の功德を具するや否や。答ふ、小兒乳を含むに、甘味を知らざれども自然に身

を益す。耆婆が妙藥誰か辨へて之を服せん。水心無けれども火を消し、火物を焼く豈に覺有らんや。龍樹天台皆此意なり。濁水心無けれども月を得て自ら清めり、草木雨を得て豈に覺有て花さくならんや。妙法蓮華經の五字は經文に非ず、其義に非ず、唯だ一部の意ならくのみ。初心の行者、其心を知らざれども而も之を行ずるに、自然に意に當る也。——四信五品とあるは能く此意を明にしたる語である。

然るに題目は心に念ずるだけで無く、口に唱ふるものである。何故に之を口に唱へなければならぬか。此の疑に答へる爲には、身口意の三業といふことを知らなければならぬ。吾々が身に行ひ、口に説き、意に思ふ所の業は善惡共に其の報を來すものである。而して身口意の三者は互ひに影響を與へあふこと勿論である。意に思ふ所が邪であれば、身の行ひにも惡行が現はれ、口に説く所も惡言となる。又口に惡言をいへば、それが意にも影響し、行にも影響する。

身口意の
三業

唱題の聲

身に行ふ所の他の兩者に及ぶ影響も亦同様である。故に吾が心に於て深く念ずる所のことは、自ら吾が言に現はれざるを得ぬので、南無妙法蓮華經といふ語は自ら吾が心の底から發したる聲でなければならぬ。而してまた吾が誠心誠意を以て、口に唱ふる題目の聲は、直ちに吾が身と吾が意とに影響して、吾が信仰を増進せしむる大なる力をもつのである。

今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて、十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて、釋迦一佛の分身の諸佛と談ずる故に、一佛一切佛にして、妙法の二字に諸佛皆收まれり。故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功德莫大なり。諸佛諸經の題目は法華經の所開なり、妙法は能開なりと知つて法華經の題目を唱ふべし。——唱法華題目鈔

と教へられてある。また

佛の御心の我等が身に入らせ給はずば唱へ難き歎。——妙密上人御消息

とあると共に、

文盲にして一字を覺悟せざる人も、信をいたして唱へ奉れば、身口意三業の中には、先づ口業の功德を成就せり。若し功德成就すれば、佛の種子胸の中に收まり、必ず出離の人となるなり。——總在一念鈔

とあるに心を止むべきである。自己の信仰を確定することが大事である、多く知り博く識るは必ずしも益あることでは無い。

須梨槃特は三箇年に十四字を暗にせざりしかども佛に成りぬ、提婆は六萬藏を暗にして無間に墮ちぬ。是れ偏に末代の世を表するなり。——三三藏新雨事とあるはまことに痛快なる言である。

4、本門の戒壇

本因本果の二妙によつて、吾等凡夫が成佛すべき途は明にされても、吾等は如何なる場所に身を置き、如何にして此の修行をすべきかを明にしなければ、

本國土

まだ充分とはいはれぬ。是れ本國土妙に就ての研究の必要なる所以である。如何なる人にも、その人に相應したる國土がなければならぬ。國土は其の人の徳に應じて定まる。徳は其の積み來つた行の結果であるから、國土は畢竟その果報の現はれたものと云つて宜い。しかし此の國土に於て更に多くの事を成し、多くの徳を積むのであるから、國土の定まるといふことが、今後の働きに基礎を與へるものとも考へられる。諸佛にはそれ／＼定まつた淨土がある。例へば阿彌陀如來は西方極樂世界、藥師如來は東方淨瑠璃世界といふ如くである。而して法華經に於て示されたる佛の本土といふものは、此の娑婆世界である。されば吾々は此處を穢土として厭ふに及ばず、此處を淨土と化すことに力を用ゆるが宜いのである。法華經の神力品に、十方世界の衆生が此の娑婆世界に向て、釋迦牟尼佛を禮拜することが記されてあるのは、明に此の理想を語るものである。

戒壇の必
要

吾々が此の娑婆世界に於て法華經を信じ、法華經を弘めて、此處を寂光の淨土にするといふ理想をもつ以上は、此の理想の實現に急がなければならぬ。それにはたゞ漫然と之を信じ之を弘めるといふだけで無く、之を弘むべき途を確乎と立てなければならぬ。是れ則ち戒壇の必要ある所以である。戒壇が無ければ、本國土たる娑婆世界が眞に本國土たる性質を發揮し得ぬのである。人には文明の程度が種々異なるけれども、苟くも人である以上は必ず、社會を成して住むに定まつてゐる。如何なる蠻人でも、孤獨の生活をして居るといふものは無い。生活するといふことは、即ち『社會を成して生活する』といふことである。既に社會を成して生活する以上は、こゝに或る統一がなければならぬ、その全體を統率する力が具はつて居なければならぬ。國といふ大きな社會には政府があり國法がある。商業の組合のやうな小さな社會にも、相當の規約といふものはある。宗教の方でいへば、信仰的に統一をする必要の上から是非とも戒壇とい

自行と化
他

ふものが無ければならぬことになる。

度々繰返していふやうに、吾々は菩薩の行を積まなければならぬが、これは自行と化他とを並せ具へたものでなければならぬのである。此の自行の方に就て考へて見ると、如何に佛性を具へてゐても吾々はまだ凡夫である。正しい教へに歸依して居ても、時には心の緩む恐れがある。日蓮上人が

受くるは易く、持つは難し。さる間成佛は持つにあり。——四條金吾殿御返事
と申され、若くは

魚の子は多けれども魚となるは少く、菴羅樹の華は多くさけども果になるは少し。人もまた此の如し、菩提心を發す人は多けれども、退せずして實の道に入る者は少し。——松野殿御返事

と申されたのは誠に今の吾々に適切である。されば吾々は道理の上から斯く信じなければならぬと納得したのみで無く、日常の生活上に、心を邪徑に向はし

めぬやうな習はしを作つて、其の淨らかな空氣の中に身を浸して置くことが必要である。

又化他といふ上から云つても、一人々々に之を説破して正法に歸せしめ、更に退轉せぬやうに絶えず監督するといふやうな事の出來べき筈は無い。是非とも凡ての者を一つに鎔鑄陶冶する所の組織を立てなければならぬ。人によつて機根の利鈍、氣質の純雜等それ〴〵に異なるけれども、同じ空氣の中に住ませて、日々眼に觸れ耳に觸るゝものゝ間から、自然に感化を受け得るやうな仕組になつて居れば、遅速の差はあり難易の別はあらうとも、つまりは同じ道に入るこゝとが出来なければならぬ。是れ則ち

戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合して、王臣一同に三秘密の法を持ちて、有徳王覺徳比丘の其乃往を末法濁惡の未來に移さん時、勅宣竝に御教書を申し下して、靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべし者歟。

戒壇の意

時を待つべき耳。事の戒法と申すは是なり。三國竝に一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王帝釋も來下して蹋み給ふべき戒壇也。――

三大秘法鈔

の言ある所以である。王法とは國家社會の一切の法律制度をいふので、其等凡ての法律制度を定めるのに佛法の精神を根本としてやるのが、即ち王法佛法に冥ずといふのである。佛法の精神が斯くして王法を通じて世間に發揮せらるゝのが、即ち佛法王法に合するものである。斯る機運になれば佛法を信じ且弘むべき組織を、國家の力を以て確立することになる。而して賢愚長幼の別なく、凡ての者を共に陶冶して、非を改め惡に遠ざかつて、共に正道に歸せしむべき方法が立てられるのである。

斯る組織的の業の中心となるべきものが國中の最勝の地に立てらるべきで、之を戒壇と名くるのである。梵天王も帝釋天も、共に佛法を守護すべき神であ

戒壇の戒

る故に、此の戒壇には來下すべき筈である。此の戒壇建立に『勅宣竝に御教書を申し下して』といふは單なる理想で無く、その前例が存するのである。傳教大師が叡山に在て法華經を弘通せられた時に、戒壇をこゝに建立しやうとの志があつて、彼の延暦二十一年に於ける高雄寺の論戰も實は之が爲であつたのである。勿論此より前にも南都をはじめ所々に戒壇はあつたが、其等は皆小乗の戒を授ける所の場所で、傳教大師の志とせられた戒壇とは性質が異ふ。大師の叡山に建てやうと志されたのは『圓頓の戒壇』である。圓頓とは『諸宗を圓融し頓速に成佛す』といふことで、即ち法華經の最勝の教によつて即身成佛を期するの義である。天台宗に於て教へる所の旨である。此の教義に基いての戒壇である故に、小乗の戒壇とは全く異ふ。叡山に戒壇が建つといふのは、即ち日本國中の佛教が法華經によつて統一せらるゝことを證するものである故に、傳教大師は之が爲に一生懸命で努力せられたのである。然るに大師の生前には勅

許を得る運びに至らず、弘仁十三年大師入寂の後、その初七日に嵯峨天皇の勅許により、戒壇院を叡山に建てることが出来た。その後慈覺の時から天台の本意を失つて、密教を修することになつたので、切角の戒壇も殆んど其の意義を失つてしまつたが、傳教大師の志とせられた所はまことに遠大なことである。されば日蓮上人は、

法の流布は迦葉阿難よりも馬鳴龍樹等はすぐれ、馬鳴等よりも天台すぐれ、天台よりも傳教は超えさせ給ひたり。世末になれば、人の智は淺く佛教は深くなる事なり。例せば輕病には凡藥、重病には仙藥、弱き人には強き方人有て扶くるこれなり。——報恩鈔

と之を稱揚せられたのである。而も末に至て其の本意を失つた故に、存の外に延暦寺の戒、清染の中道の妙戒なりしが徒に土泥となりぬる事、云ても餘あり、歎きても何かはせん。彼の摩黎山の瓦礫の土となり、栴檀林の

荆棘となるにも過ぎたるべし。夫れ一代聖教の邪正偏圓を辨へたらん學者の人をして、今の延曆寺の戒壇を踏ましむべきか。——三大秘法鈔と慨歎せられた。これ自ら奮起して眞の大乗の戒壇を興すべき志を立てられた所以である。

戒無くして教の完全に行はるべからざることは、獨り佛教のみならず、如何なる教に於ても同様のことである。壁無くして室を作ることには出來ず、境界なくして國を立つることは出來ぬ。若し戒を以て之を制すること無ければ、教を守つて行くことは出來ぬであらう。天台大師が

今時の僧衆、戒律を以て心に在かずんば、恐らくは佛法を滅しなん。——

淨名經疏

といひ、また更に

經中の説の如くば、此の戒に依因して諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずること

戒律の要

疏定慧の
三學

を得。是故に比丘應に持戒清淨なるべし。清淨に守護して明珠を愛するが如くす。若し毀犯する者は器已に缺けたるが如く、堪用する所無し。佛法の邊人にして沙門釋子に非ず。——摩訶止觀と云つたのも道理である。されば佛法に於ては三學を重んずることである。三學とは戒定慧をいふ。戒は定慧と相俟つて、一を缺くべからざるものである。戒とは持戒である。吾が心を規制して過に陥らぬやうに、或る戒律を守るのである。定とは禪定である。心を一處に集めて散佚せしめず、以て眞理を案ずるのである。慧とは智慧である。惑を去つて眞を捉へ、自ら安んずると共に他を救ふのである。慧を具へたものにして初めて定を教へることも出來、戒を規定することも出來る。これが自然の順序であつて、之を法門次第といふ。しかし人に教へる場合には、先づ心を散佚せしめざることを必要を教へ、次に戒律を與へ、終に智慧を具足せしむるに歸する。即ち定戒慧の順で、之を說法次第

といふ。自ら修行する順序は戒を守るによつて禪定を得、以て智慧を具ふるに歸着する。煩惱の賊は戒以て之を捕へ、定以て之を縛し、慧以て之を殺すといふのが順である。之を修行次第といふ。

戒には種々の目が立てられてある。五戒、十善戒、八齋戒等から、多いのは二百五十戒、五百戒までもある。然るに本門の戒法に於ては斯の如く箇條を立て戒を守るので無く、法華經を信受することに依て心の根本を正しい方に向け、凡ての過を犯さしめぬやうにするのである。その據り所は法華經に、

此經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す。諸佛も亦然かなり。是の如き人は、諸佛の讚めたまふ所なり。是則ち勇猛なり、是則ち精進なり。

是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く。——寶塔品

と明に記してある。頭陀といふは梵語で、譯しては抖擻といふ。煩惱を拂ひ盡すこと、譬へば穀物の中に交つたる塵や屑を除くが如くすることである。此の

本門の戒法

文の意に依れば、眞に法華經を持つことさへ出来れば、自ら凡ての戒を持つたことになるといふのである。

さて是は言はずとも事であるが、序を以て一言して置きたい。古來から『末法無戒』といひ來つたのを能い事にして、末法に及んでは戒律などを守るに及ばぬと放言する人が往々にしてあるが、これは不心得の甚しきものである。末法は法華經流布の時である。法華經の信仰が心の根柢になつて居れば、一々戒律を守らずとも、戒を守つたと同じことになり、罪も過も一切生じて來ぬのである。然るに此の大事の信仰を外にして、戒を破つてもかまはぬといふ點だけを誇張し、反省を怠り驕慢に流るゝ者あらば、小乗の徒よりも劣ること甚しといはなければならぬ。深草の慧明師が

夫れ戒とは何ぞや。惡を作さざるの謂なり。若し強て無戒の義を立つる者は、強て惡を作さんと欲する者の如し。思はざるの甚しきなり。——草山要路註

末法無戒

と云つたのは穩當の言である。

法華經を持つことが即ち戒を持つことになるとすれば法華經に背くことを禁ずるのが即ち眞の戒律になるわけである。即ち謗法を禁ずることが詮一である。謗法とは言に出して法華經を謗ることをのみいふのでは無い。天台大師が

謗とは乖背の義なり。——梵網經疏

と斷定された一言によく盡きて居る。凡て法華經の本意に背くのは謗法である。その謗法の類を十四に分つことは譬諭品の文によるのである。(法華經の梗概の項を參照ありたい)此の十四謗法の何者なるかを數へて見ると、

一には憍慢。自ら足れりとして進んで求むる心が無く、正法を聞かうといふ志を起さぬのである。

二には懈怠。輕薄冷淡の性質であつて、一生の覺悟を定めやうといふ熱心が無いから、正法に遠ざかつて過るのである。

十四謗法

謗法の禁斷

三には計我。凡て我見を立て、正しい教へに就くといふ考へを起さぬから、是非を枉げ正邪を分ち難くして過るのである。

四には淺識。自己の識る所の淺薄なるに氣付かず、更に進んで深く學ばうとせぬものである。

五には著欲。私慾に執着して、之を離るゝことを知らず、法を輕んじ教を疎んずるものである。

六には不解。教を聞いても其の眞の意を解し得ず、而も自ら解し得たりとして之を匡つことをせぬのである。

七には不信。自己の私心に僻するが爲に、當に信すべき教を信ぜぬのである。

八には墮覺。正法を信ずるものを或は卑み或は惡み、之を顔や形に現はすものである。

九には疑惑。愚痴にして正しき決斷をし得ぬ故に、信すべきか信すべからざる

るかと思ひ惑ひ、或は信じ或は捨つるのである。

十には誹謗。正法を非難し、正法を持つ者を非難して悪言を放つのである。

十一には輕善。正法を持つことが根本的の善である。之を輕んじ賤むのは罪の甚大なるものである。

十二には憎善。これは善を輕んずるに止まらず、之に對して逆心を懷き憎み嫌ふものである。

十三には嫉善。これは正法の榮ふるを嫉み、之を妨げんとするの害心を起すのである。

十四には恨善。これは正法の榮えて自己の排斥せらるゝのを、已に顧ることせずして怨み憤るものである。

此の中でも十一より十四までのものは殊に重い謗法で、これに「四不善罪」といふ名さへ與へられてある。斯る十四謗法を離るゝことが出來さへすれば、凡

謗法者

ての罪や過は自ら無くなつて行くべき筈である。

信ずるといふは誠心誠意で信ずることである。信ずるを装つて、その私を成さんと企つる者があつたら、その罪は重大といはなければならぬ。たとへ口に經を誦し題目を唱へやうとも、心に於て四不善罪その他を犯すならば、正しく謗法の大罪人である。又自ら此等の罪を犯す積りが無くても、自ら覺えざる間に斯る邪念が萌さば、恐るべき結果となるであらう。

此等の禁を背く重罪は目には見えざれども、積りて地獄に墮つること譬へば寒熱の姿形もなく、眼には見えざれども、冬は寒來りて草木人畜をせめ、夏は熱來りて人畜を熱惱せしむるが如し。——松野殿御返事

との嚴戒をよく／＼思ひ合すべきである。

謗法の類は斯の如く多くあるが、謗法を犯す者にも種々ある。謗法の人あり、謗法の家あり、謗法の國あり、いづれも之を匡さなければならぬ。たとへ吾一

與同罪

人謗法を犯さずとも、謗法の家に在て之を改めることが出来なければ、その責を免るゝことは出来ぬ。謗法の國に住んで、之を匡すことが出来なければ、その責を免るゝを得ぬのである。凡て他の人の謗法を見て、之を改めしむることに力を用ゐぬのは、佛の慈悲を受け繼ぐ者とはいはれぬ。されば己が身に罪を犯さずとも、罪を犯した者の與黨と見做されなければならぬ。即ち之を名けて與同罪といふのである。日蓮上人之を戒めて、

如何なる大善を作り、法華經を千萬部讀み書寫し、一念三千の觀道を得たる人なりとも、法華經の敵をだにも責めざれば得道ありがたし、たとへば朝に仕ふる人の十年二十年の奉公あれども、君の敵を知りながら奏もせず、私にもあだますば、奉公皆失せて、還て失に行はれんが如し。——南條兵衛七郎殿御書と申された。此邊の用意が疎かであつてはならぬことである。

されば自ら正しい信仰を勵んで謗法の罪を離るべきは勿論、一家を正しい信

仰で固めて、苟くも此の家に入來る者は、皆此の淨らかな空氣の中で化せられて、謗法を犯さぬやうにしなければならぬ。殊に國は凡ての事を成すに基礎となるものである故に、國としての信仰を確立し、苟くも此の國に入るものは、その國民は勿論、たとへ外國人たりとも之を感化し之を陶冶して、謗法の罪を離れしめなければならぬ。その曉に達するまで各自に信を勵み行を磨くと共に、世に此の貴い教を弘むることに力を用ゐ、決して懈怠があつてはならぬ。斯くて事實の上に、此の國と此の法とが一致し得た時、一國の信仰を統一すべき戒壇がこゝに建立せらるゝであらう。是は空理でなく、事實の上の的確に現はれ來るべきことである。日蓮上人が『時を待つべきのみ』といふと共に、直に續けて『事の戒法と申すは是なり』と書かれたのは、その意の在る所まことに深しといふべきである。

一九 信仰的生活

此の娑婆世界に於て、本門の本尊に對して、絶對の信仰を捧げ、その本尊に向つた時の心をその儘に移して、日常の行事に當る。而して此の娑婆世界が漸次に寂光淨土と化し來ることを身の悦びとする。これが吾々の期する所の信仰的生活である。斯る生活を續けて居るものは、如何なる境遇に在ても、其の心に悦びが絶えぬ。その悦びの最も大なるものが、佐渡に配流中の日蓮上人の筆に上つて、

當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經に奉る、名をば後代に留むべし。——開目鈔

といふ如き語ともなつたのである。『命は法華經に奉る』とある、その法華經の中には眞の自己の生命が存してゐるのであるから、命を法華經に奉るのは、即

信仰の悦び

ち眞の生命を完うする所以である。日本第一に富める者と自稱せられたのも道理である。

五尺の身に汚れたる血肉を盛り、五十年の命の中で利害得失の變化に惱まされてゐる吾々凡夫が、此の生をかへずして此儘に、佛となるべき道に入ることが出來るとは、いかにも貴いことである。此の貴い功德が法華經を信ずることに依て得られるといふのであるが、なほ少く遡つて此處まで來る徑路を調べて見たいと思ふ。先づ大乘佛教に於て教へられる六波羅蜜といふことから云つて見やう。波羅蜜とは梵語であつて、譯しては度といふ。度とは生死の海を度つて涅槃の岸に到るの意である。即ち此の六種の事を修するのが、さういふ結果を生むのである。六度とは即ち

一に布施。これに二種ある、財施と法施である。財施とは一切の財を以て人に施すこと。法施とは自ら聞き得たる善き法を清淨の心を以て人に説くこと

六波羅蜜

である。此の「清淨の心」といふが注意すべき所である、報を求むるとか、名聞を欲するとかいふのは清淨の心では無い。

二に持戒。好んで善道を行じて、自ら放逸にせぬをいふので、これは身口意の三に亘るものである。

三に忍辱。これにも二種ある、一には生忍、二には法忍である。生忍とは恭敬供養の中に於て憍逸の念を生ぜず、嗔罵打害にあふとも怨恨の念を生ぜぬをいふ。法忍とは寒熱風雨飢渴等の害にあふとも、能く忍んで瞋恚憂愁を生ぜぬをいふのである。

四に精進。これにも身精進と心精進の二種がある。身精進とは善法行道禮誦を勤修し、また他の爲に講説するに自ら放逸にせぬをいふ。心精進とは勤めて善道を行じ、心々相續して自ら放逸にせぬをいふと。此の「心々相續」といふことが大切である、即ち不斷の努力が大事なのである。

五に禪定。心を專にし念を歛め一を守て散ぜざるの謂とある。これにも凡夫の修禪即ち世間禪と、聲聞緣覺の修禪即ち出世間禪との別ちがある。

六に智慧。此の中には、一切無碍にして能く諸の衆生の爲に種々に演説するといふことを含んでゐる。利他の働きの無いのは眞の智慧ではないのである。

此の六度はいづれも菩薩としての行を積む上に必要なるものであるが、智慧に利他の働きの含まるゝ上は自ら布施も此下に含まれ得べく、忍辱と精進との二は持戒の中に含まれ得べき故に、前に云つた三學が遺憾なく出來れば、六度も皆完全に修し得べき筈である。而して三學は即ち三秘の實行によつて完了せらるべきは前に述べた通りである。三秘の具はつたものが即ち日蓮上人の宗旨なので、上人は

宗と申すは戒定慧の三學を備へたるものなり。——聖密房御書

と申された。然らば法華經を信じて菩薩の道を行ずるに、如何様の修行をすべ

きかといふに、これに五種修行といふことを分つのである。

五種修行の據り所は法華經の法師品である。五種とは一に受持、二に讀、三に誦、四に解説、五に書寫である。佛の教をよく信じて、之を永く持つて行くのが受持である。經を開いて讀むのが讀で、暗誦するのが誦である。解説とは自ら知り得た所を他の人に向つて説くのである。書寫は即ち經文を寫して、之を他人に傳へて讀ましむるのである。此中で第一の受持といふことが最も大切なので、之を正行といふ。他の四つの修行は要するに受持の爲である故に、之を助行といふのである。「信力の故に受け念力の故に持つ」と天台大師の言にある。たとへ一たびは深く信じて、永く之を憶念して持ち続けることが出来なければ何にもならぬ。

勿論此の受持には身口意の三つが相一致して働いて居なければならぬ。身口意の三業が相俟ち相助けて進むべきことは既に述べた。斯くして正行と助行と

相俟ち、身口意正しく相應して、能く信じ能く持つこと久しくなれば、吾が心の中に次第に新なる天地が開かれて來べきである。それは佛と吾が心との間に感應が続いて起つて居るから、吾が心には刻々に靈妙なる力が加はり來るのである。固より此の時に於ける吾が心の活動は單なる理解力とか、感情とかいふやうな部分的のものでは無く、心の底から起つて來る根本的の活動である。別の語でいへば、吾が心の全體と佛とが觸れあつて居るのである。斯の如くであれば、

闇なれども燈入りぬれば明かなり、濁水にも月入りぬればすめり。明かなること日月にすぎんや、淨きこと蓮華にまさるべきや。法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名く。——四條金吾女房御書

と教へられた如く、心の中の闇は次第に消えて失すべきである。

此の貴い信仰を懷いて世に立つ人は自ら其の心に無限の悦びがあるのみなら

ず、常に大なる恵をその周囲のものに與へて居るのである。

白粉の力は漆を變じて雪の如く白くならず。須彌山に近づく衆鳥は皆金色なり。

法華經の名號を持つ人は一生乃至過去遠々劫の黒業の漆變じて、白業の大善となる。いはうや無始の善根皆變じて金色となり候なり。——妙法尼御前御返事

とある如く、法華經を信ずる者の身には偉大なる力が宿るのである。即ち經の中に

當に知るべし是人は、則ち如來の使なり。如來の所遣として如來の事を行ずるなり。——法師品

とある如く、普通の人では無いのである。前にもいふ如く、佛性を具へたのは吾々人類だけでは無く、有情非情に亘つてといへば、凡そ此の天地間のありと有る物に、盡く本佛の不思議な力が宿り、貴い性質が宿つて居る筈である。ただそれが潜んで居て活動せぬのみである。今若し正しい信仰を持つて、佛と常

に相接して居る人があれば、此人は自己の心に潜んで居た佛性を次第に開發して行くのみならず、その周囲の人と物とに具はつてゐる佛性を開發する力をも併せて具へるのである。此の人の心の力は周圍の人にも働き、又周圍の物にも働く。此の人の顔を見た者、此の人の聲を聞いた者は、その心に必ず或る感動を受けて、佛道に入るべき縁を作る。此の人の手を觸れた物、此の人の足で踏んだ物は、木でも草でも、土でも石でも、共に其の佛性を啓かれて、此の國土を寂光の都とすべき功德の一部分を具へるやうになる。

佛と共に
在る

斯くて此の人の世に立つて爲す業は、細大となく皆貴い力を宿し、大なる功德を具へる。その功德によつて此の人は益々佛に近づいて行き得るのである。斯くなれば其の眼に映るもの、形、その耳に入るもの、聲が次第に以前とは異つて来る。その形や聲が異つて来るのではないが、その眼に映り方、その耳に入り方が異つて来るから、如何なる事の中にも、如何なる物の間にも、大なる

貴さを認め大なる悦びを感じ得るやうになるのである。即ち此の人は常に佛の姿を見、常に佛の聲を聞いて居るのである。

我等が居住して一乗を修行せん處は、何れの處にても候へ、常寂光の都たるべし。我等が弟子檀那とならん人は、一步を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申す許りなし。——最蓮房御返事とあるは謂あることである。

但し誰も人である以上は、たとへ苦中に樂を認め得やうとも、苦その物を全く覺えぬやうにならう筈はない。沙の中に珠を求め得ても、沙は沙であつて、珠に變りはせぬ。日蓮上人とても決して凡ての苦を苦と思ふなと教へられたわけでは無い。

苦をば苦と覺り、樂をば樂とひらき、苦樂共に思ひ合せて南無妙法蓮華經と
うち唱へ居させ給へ。——四條金吾殿御返事

苦樂の解

滅罪の爲
の苦

と明に教へられてあるのである。然らば自ら正しい信仰の上に立つてゐながら、種々の苦を受け種々の難にあふのを如何様に解釋すべきであるか。それは苦を受け難にあふことに依て、過去の罪を消し、成佛の縁を作るものと解するのである。因果の關係は一毫の狂ひも無く存するものである。若し因果の關係を無視して、恣に福を求めやうとするものがあれば、それは邪見の徒である。されば己が過去に作つた善惡の業に對しては、正當の報を受くべき筈である。苦を堪へ難を凌いで過去の惡業の報を受け終れば、成佛の途は即ち吾が前に開かるべきである。日蓮上人の御書中には之に就ての説が度々出てゐるが、今その一例をあげて、上人の意の在る所を明にしやう。

日蓮も又かく責めらるゝも先業なきにあらず。不輕品に云く、其罪畢已等云云。不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲せられしも先業の所感なるべし。何に況んや日蓮、今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅が家より出たり。心

こそ少し法華經を信じたる様なれども、身は人身に似て畜身也。魚鳥を混丸して赤白二滯とせり、其中に識神を宿す。濁水に月のうつれるが如し、糞糞に金を包めるなるべし。心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶ほ恐ろしと思はず。身は畜生の身なり、色心不相應の故に愚者のあなづる道理也。心も又身に對すればこそ月金にもたとふれ。又過去の謗法を案ずるに、誰か知る、勝意比丘が魂にもや、大天が神にもや、不輕輕毀の流類なるか、失心の餘殘なるか、五千の上慢の眷族なるか、大通第三の餘流にもやあるらん、宿業はかり難し。鐵は炎きたひ打てば劍となる、賢聖は罵詈して試みるなるべし。我今度の御勘氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脱れんずるなるべし。

日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば、今生に念佛者にて數年が間、法華經の行者を見ては、未有一人得者、千中無一等と笑ひしなり。今謗法の醉さめ

て見れば、酒に酔へる者父母を打て悦びしが、酔さめて後歎きしが如し。歎けども甲斐なし、此罪消がたし。

法華經は月と月とを竝べ、星と星とを連ね、華山に華山を重ね、玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を、或は上げ或は下して嘲弄せし故に、此八種の大難に値へるなり。此八種は盡未來際が間、一づゝこそ現すべかりしを、日蓮強く法華經の敵を責むるによつて、一時に聚り起せるなり。譬へば民の郷郡などにあるには、いかなる利錢を地頭等におぼせたれども、いたく責めず、年々に延べ行く。其所を出る時に競ひ起るが如し。斯由護法功德力故等は是也。——佐渡御書

即ち多くの難にあへば、早く過去の罪を滅することが出来るから、却て感謝すべきことなのである。

されば法華經の行者は如何なる難にあふも、之を世間の爲からいへば、吾が

難に堪へて法華經を弘むる故に世間が救はれるのであると信じて、深く之を悦ぶ。又一身の爲からいへば、斯く難に堪へて過去の罪を滅するによつて、疾く佛になるべき運が開かれるのであると思つて悦ぶのである。苦は固より苦であるが、その苦に無限の悦びが伴ふから、之を勇ましく堪へて行かれるのである。又吾に苦を與へる者に對して怨恨の念を起すことは全く無いのである。信仰的生活は斯くも氣高く、又光輝あるものである。

110 廣宣流布の時

末法の世に廣宣流布すべき法華經は、今に至てもまだ日本一國にすら弘まらぬ、末法の始めに日蓮上人が出られて、自ら廣宣流布の魁したりと稱し、『日本一國に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的にするなるべし』と豫言されたが、その後六百餘年を経ても、まだ事實となつて現はれぬ。さては釋尊の言も、日

蓮上人の言も信ずるに足らぬものであるか。

否、それは時の未だ至らざるが爲であつたのである。末法の世に入つて久しくなつても、今までに末法の世相は未だ充分に現はれて來なかつた。世間が切迫したと云つても、まだ甚しい程度までには迫らなかつた。未だ絶大の苦難に逢はなかつたから、最も深い反省も起らず、最も強い自覺も生み出されなかつたのである。世界もさうであつたが、吾が日本國は殊更さうであつた。人の心にまだ多くの緩みがあつた。それで法華經の廣宣流布の機運がまだ熟さなかつたのであると思はれる。壽量品によれば『諸子後に佗の毒藥を飲み、藥發し悶亂して地に宛轉す』といふ時に、その『色香美味皆悉く具足せる』良藥が與へられるのである。今までの世間はまた悶亂して地に宛轉するまでに至らなかつた故に、凡藥も良藥も明に區別せられなかつたのである。

然るに『今正しく是れ其時なり』といふべき時節が來た。五年越しの大戦争

今は其時

は、歐洲の天地を極端に近い慘狀に陥れたが、これでは未だ行詰りとなりさうも無い。此の大戦争の終つて後も、各國の競争はまだ一更に緩和されず、智力と財力との戦争に於て、東洋の天地に今の大戦争に數倍せる慘狀がやがて現はれ來るであらう。たとへ血を流し骨を曝すことは無くとも、人の神を傷め心を疲らすことは非常なものであらう。その時こそ吾が國は八方から智力と財力との戦を挑まれ、包圍攻撃の状態に陥るであらう。而も今の日本國民の如くに、遠大なる抱負なく、強烈なる意氣なく、感激の情に乏しく、誠實の風を缺き、眼前の小利を争つて百年の大計を立つることを思はぬ者が、此の烈しい戦の中に捲き込まれて安全であり得やう筈は無い。必ず大失敗が來るであらう、大危難が迫るであらう。開國以來未曾有の難局が今吾々の眼前に迫つてゐる。

幸に建國の理想が空なもので無いならば、(余はさう信じたい)日本人の祖先以來傳へ來つた血が冷えずに居るならば、(余は固く之を信じたい)此時に於て

廣宣流布

大なる覺醒が來らなければならぬ。而して此の難局に處すべき覺悟を定め、實力を養はんが爲に、正しい信仰の上に立たんことを、上下老若を通じて共に求めて來なければならぬ。最勝の經たる法華經の流布すべきは正しく此時でなければならぬ。凡ての大難を風の前の塵と見て、

我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ。――

開目鈔

と誓はれた日蓮上人の精神が復活せらるべきは正しく此時でなければならぬ。而して此の法華經は獨り日本國民の爲のみならず、娑婆世界の凡ての人の爲に遺されたものである。博愛も人道も空言であつたことを、此の大戦争によつて證據立てた西歐の諸國民は、白法隱没の世であることを深く思ひ知つて、即ち大白法たる法華經の教へを求め來らなければならぬ。日本を流布の中心として、やがて一閻浮提に弘まるべき法華經は、正しく今より後のために遺された

ものであつた。しかし現在の吾が國民の信仰状態を顧みると、斯ういふことを考へるのは空想に過ぎぬともいひたくなる。大に奮はなければならぬ。

廣宣流布の豫言が實現されるか、されぬか、吾々が身を以て之を試みるより外はない。機運は自然に熟するもので無い、吾々が機運を熟せしむべく努力するより外は無い。此の大切な場合に區々たる利害や區々たる感情に囚はれて居るものは、たとへ口に題目を唱へて居ても法華經の敵である。何の宗派でも宜い、何の門流でも宜い。僧俗の區別は問はぬ、貴賤の懸隔は問はぬ。志を同にするものが共に日蓮上人に復歸したらそれで宜い。さうして六百年前の精神を今に復活させたらそれで宜い。此の大精神に於て合一することが出来たら、他の小問題が如何に多くあらうとも、解決の途は自ら開けるであらう。

極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。——報恩鈔

といふは、獨り日蓮上人御自身の爲のみで無い。正しく今後の吾々の爲の言である。

日蓮主義概論終

著 述 目 録

第 四 版

文學士 小林一郎著

日蓮主義講話

(四六版五百頁 金壹圓五拾錢 郵税八錢)

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と教義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸着點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れるものは之によりて現今の時勢と宗教の關係を領解し得べし特に青年の人々に本書の一讀をすゝむ。

大正七年五月廿一日印刷

大正七年五月廿四日發行

日蓮主義概論

正價金壹圓七拾錢

著 者 小 林 一 郎

東京市神田區表神保町七番地

發 行 者 阪 本 眞 三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 者 青 柳 十 一 郎

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印 刷 所 株式會社 秀英舍第一工場

不 許
複 製



發 行 所

東京市神田區表神保町七番地
振替貯金口座東京八七貳番

大 同 館 書 店

慶應義塾大學教授 稻垣末松先生修補 渡部政盛先生新著

最新教育學の說 敘述及批判

〔菊判最上製美本全壹冊箱入五百頁 正價金貳圓 郵稅拾二錢〕

文檢受驗者 の最大福音

本書は最近教育の學說並に思想を本質的に敘述し之を深刻に論じ徹底的に批判したるものにして第一章は教育思想の概論第二章は教育思想の史的變遷第三章は教育思想の社會的變遷第四章は教育思想の文化的變遷第五章は教育思想の政治的變遷第六章は教育思想の經濟的變遷第七章は教育思想の宗教的變遷第八章は教育思想の倫理的變遷第九章は教育思想の教育的變遷第十章は教育思想の實踐的變遷第十一章は教育思想の理論的變遷第十二章は教育思想の方法的變遷第十三章は教育思想の組織的變遷第十四章は教育思想の制度的變遷第十五章は教育思想の政策的變遷第十六章は教育思想の行政的變遷第十七章は教育思想の司法的變遷第十八章は教育思想の立法的變遷第十九章は教育思想の司法的變遷第二十章は教育思想の立法的變遷

〔現今教育主潮・副潮・細潮の最も完全なる縮圖〕 好評 激甚

要大次目内容

第一章 教育思想の概論
第二章 教育思想の史的變遷
第三章 教育思想の社會的變遷
第四章 教育思想の文化的變遷
第五章 教育思想の政治的變遷
第六章 教育思想の經濟的變遷
第七章 教育思想の宗教的變遷
第八章 教育思想の倫理的變遷
第九章 教育思想の教育的變遷
第十章 教育思想の實踐的變遷
第十一章 教育思想の理論的變遷
第十二章 教育思想の方法的變遷
第十三章 教育思想の組織的變遷
第十四章 教育思想の制度的變遷
第十五章 教育思想の政策的變遷
第十六章 教育思想の行政的變遷
第十七章 教育思想の司法的變遷
第十八章 教育思想の立法的變遷
第十九章 教育思想の司法的變遷
第二十章 教育思想の立法的變遷

最新刊

〔四六判最上製美本全壹冊五百卅頁 正價金壹圓五拾錢 郵稅八錢〕

現代強健法の眞髓

▼各種強健法の最も完備せる縮圖▲

□伯爵 土方久元閣下題字 大津復活先生新著
□醫學博士佐伯矩先生序文

現代の急務とは何ぞ？ 世界的歐洲大戰亂の活

十指を屈するも猶足らざるの感がある。訓が國民を覺醒したるは、非に非ざるに其の眞相に觸れ眞實の味を痛切なる教訓を與へ遂に今日に如き國民體育振興の急務は、何れも強健法の盛んなるに喜ぶべき現象である。けれども此等諸事と謂はなければ、其の眞髓に觸れしむる所の著書はない。斯道に成りしものにて内容は、現代盛行の本書は之れ等古今東西の諸説を爲め、其の眞髓を捉へ、身を改造し國民體育の革新を念とする人、士幸に熟讀を賜へ。自己の心

21845
三ス

大 同 館 發 行 圖 書 目 錄

內 容 目 次 の 一 班

現代の急務	積極的體育の極致	斷食療法の科學的説明	標準保健法の研究
呼吸強健法の源流	禊と心身改造	斷食の歴史	米麥榮養の研究
先哲の深呼吸獎勵	生沼博士の科學的研究	既食修行者の信條	天然生活法の眞髓
深呼吸と諸藝の極意	各種呼吸法の批判	斷食と精神修養	水と人生
深呼吸の科學的研究	吉田學士の批判	抵抗養生法の眞髓	日光浴の偉效
二木式腹式呼吸法	二階堂教授の批判	胃腸病通俗療法	空氣浴の偉效
二木式呼吸と心身改造	胸式腹式の總括的比較	通俗攝食療法	土と親しめ
遠山博士深呼吸法	深呼吸法實行上の注意	石線式食養法の眞髓	天然療法の實例
岡田式靜座法の眞髓	川合式強健法の眞髓	食養論の細説	生殖器諸病
靜座法と心身改造	實修要件二三の説明	化學的食養十訓	自然療法の眞髓
藤田式息心調和法	内臟強健法	現代榮養學の眞髓	水治法
凝念法の眞髓	主要筋肉鍛鍊法	常識的榮養研究	冷水浴の方法
禊式強健法の眞髓	斷食強健法の眞髓	食物の化學的研究	海水浴の偉效
民族衛生の根本義	村井弦齋氏の實驗	食物組成の細説	精神と肉體との關係
禊に関する神事の概説	長期斷食の實驗	消化吸收の科學的研究	
禊の實驗	斷食と治病	滋養價の研究	

（以上細目は
盡く略す）

325

288

終